

はじめに

上伊沢 ひろし

むかし　むかし・・・の語り口で始まる、むかし話を子守唄がわりに、聴きながら寝入った幼少の頃の記憶は、懐かしさをこえて、大人になった日の、血肉になっような気がいたします。

それは、悪人はかならず仕返しをされたり、善人は、いつか報われるといった人間社会の、「いましめ」であったのかも知れません。日本人の道徳心の根源が、むかしばなし、には含まれているように思います。

さて、この度、さろま　むかし　むかし　をまとめるにあたり、町の古老の話を聞き取りました。

その地に生まれ育ち、見聞きした古老の思い出話を、聞き取りながら、むかし　むかしの、昔話と少し違うように思います。

それは確かにあった事で、今につながっている、故郷の歴史であります。そしてそれは、語る人の私有の思い出。語る人と共に、いつか忘れ去られていく運命に、あるということです。

ですから、ふるさとのむかしばなしの収集は急がなければなりません。

ふるさとの歴史の証人、

古老の話には、そういった重さがありました。

私たちが、過去を旅して、五年の年月が過ぎました。やっと、旅もひとまず終わりました。そして、その間に出逢った方のなかには、すでに帰らぬ旅に旅立った人もおります。

多くの先人の方々とともに、感謝の意を含めてご冥福をお祈りいたします。